ミニ物語～風と雲～

凪夜　流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミニ物語～風と雲～

【Ｎコード】
Ｎ０３８１Ｖ

【作者名】
凪夜　流歌

【あらすじ】
ワタシは風になりたかった。
君のような、風になりたかった。

1（前書き）

こりなくてすみません^^;この話はおそらく連載終了出来ると思います

1

新しい春を迎えた。
桜並木から降り注ぐ桃色の雨を浴びながら坂を上る、どこにでもあるような通学路。
ワタシは、何人もの生徒の合間を縫いながら歩いていた。
幾枚もの花びらがワタシの頬や制服に当たっては、ヒラヒラと舞い落ちていく。
ふと、懐かしいような、暖かい笑い声が聞こえたような気がして、隣をふり向いた。
でもそこに、君の姿はない。
ワタシの隣に、君がいない。

新しい春を迎えたワタシは、いつの間にか高校生になっていた。

2

「同じクラスの白水　沙希だよ。鶴来　進くんだったよね？よろしく！」
　彼女と始めて話したのは小学2年生の夏だったと記憶している。
元々の引っ込み思案も手伝って、ここに引っ越して来た時も人と上手く話せなかった僕に、始めて親しく話してくれたのが沙希だった。
沙希はいつも成績優秀で、美人で、クラスの人気者。
僕とは正反対の女の子。
いつも明るくて、元気で。
沙希は僕の憧れだった。
　沙希は物語を想像するのが好きで、いつも僕に話して聞かせてくれた。
僕も沙希の物語が大好きだった。
キラキラした世界観のわくわくするようなファンタジーの話や、ドキドキするような恋物語。
なにより、それを楽しそうに話す沙希が大好きだった。

　それは小学5年生の冬のことだったと思う。
透き通るような青空の下、将来の事について話していた。
何故そういう話しになったのかは覚えていないが、楽しかったということは覚えている。
隣を歩く沙希が嬉しそうに口にした。
「サキは、将来小説家になりたいな」
「沙希ならなれるよ！」
「ほんと？」
「うん！」
僕は自信を持って頷いた。
わくわくして、ドキドキして、先の気になる物語。

それを書ける沙希なら絶対なれる、という核心のようなものまであったような気がする。
ニコニコと笑う僕につられて沙希も満面の笑みを浮かべた。
「じゃあ、サキが物語を書いた時は進が読者第一号になってくれる？」
「うん！」
そう、僕等は約束した。

3

風があるから雲は動ける。
風の動き方次第で、雲は大きさや形、名前までもその姿を変える。
ワタシはまさにその雲だった。
君という風に吹かれて走る愚かで小さな雲。
風のように早くは走れないけど、一生懸命付いて行こうとする、弱く、小さな雲。
その雲はきっと、雨も降らせない。
雷も鳴らせない。
季節も教えてやれない。
誰もその存在に目もくれない。
あったって意味のない雲だけど。
君は、君だけはきっと、ワタシを見つけて運んでくれる。
ほっとするような笑顔で、声で、運んでくれる。

ワタシの大好きな、優しくて暖かい風に乗せて。

3（後書き）

この連載は携帯から行っているので、パソコンでは読みにくいかもしれません。
今パソコンがつかなくて確認出来ないので、もし悪いところがあったら教えて下さい

4

『ジャックは思った。
ここで逃げちゃダメだ。
ここで逃げたらミーティア姫がどうなるか・・・。
「ミーティア姫は私が守ると決めたのだ！貴様らに手出しはさせん！」
ジャックは剣を振り上げ、多勢無勢の敵の中へ飛び込んだ。
だが』
「だが・・・」
この先が思い浮かばない。
話はもう、クライマックスに向かっているというのに。
中学生になった僕と沙希は文芸部に所属していた。
「あら、進。ずいぶん進んだのね」
楽しそうに覗いてくる沙希に僕は苦笑を漏らす。
「そんなことないよ。まだまださ」
元々僕は、沙希に誘われてこの文芸部に入ったのだ。
何の取り柄もなく、運動も苦手。
部活に入る気はさらさらなかった。
でも、沙希が誘ってくれるなら。
沙希がいるから、と思い文芸部に所属したのだ。
だが、やはり自分には才能がなかったらしい。
沙希は上手と言ってくれるが、僕の物語はさして深い話な訳でもないし、文も下手くそ。
正直、ここは場違いなんじゃないかと思い始めてもいる。
　沙希ももちろん物語を書いている。
それもかなりの長編らしい。
まだ終わっていないからと、読ませてはくれないが、どうやら恋愛小説のようだ。

甘くてちょっぴり苦い初恋をする話だという。
「絶対沙希のが上手いに決まってる」
ニコッと笑って言った僕の言葉に、沙希は困ったような笑みを返した。

4（後書き）

今回の話は長めなのかな？

5

　ワタシは風になりたかった。
いつも笑みを絶やさない、強い風になりたかった。
けどやっぱり、雲は雲。
風になんて、なれるはずがなかったんだ。
雲は一生、雲のまま、生きていかなきゃいけない。
のろまなカメは、ハンデなしじゃ足の速いウサギには勝てない。
そう。これは絶対。
ワタシは、風になりたかった。
優しく雲を包む、風になりたかった。
　ワタシは名前すら付かない小さな雲。
周りの雲の真似をして不様についてまわる、醜い雲。
それでも君は、ワタシを見付けてくれるだろうか。

6

二年生の夏。
部長の計らいで、文芸部員全員で小説を出版社に送り付ける事になった時は驚いた。
僕は無理だ。とすかさず断ったにも関わらず、部長は黙って僕に大量の原稿用紙を渡してきた。
「締め切りは一ヶ月後の８月２０日だ」
夏休みに部活に来るはめになった瞬間だった。

長編が苦手な僕は短編をいくつか書いて乗り切るつもりだ。
沙希は以前から書いていた恋愛小説がそろそろ終わりそう。と嬉しそうに話していたから、多分それを送るのだろう。
はたして沙希は、あの約束を覚えているだろうか。
物語を書いたら、最初に読ませてくれる。という約束を、覚えているだろうか。
いや、多分忘れている。
忘れっぽい沙希の事だから、将来の話をした事すらきっと忘れているに違いない。
そう思うと、少し胸の辺りが苦しくなった。

7

何故ワタシはここにいるのだろう。
そう思うようになったのはいつからだったか。
自分は雲だと言いつつも、フワフワと形を変えて旅をする本物の雲にはなれない。
所詮ワタシは醜い雲だとも名乗れない、ちっぽけな子供なのだ。
なぜワタシはここにいるのだろう。
ワタシがいる価値なんて。
ワタシが生きている意味なんて。
きっと小さな微生物ほどもないに決まっているのに。
ああ、ワタシは君のような風になりたい。
君のような、綺麗な風に・・・。

8

受賞したのは僕だった。
雑誌の端の方だけど、確かに載っていた。
そこに、沙希の名前はどこにも無かった。
雑誌を見ながら俯く沙希に、声をかけようとしたが、沙希は避けるように部室を出て行ってしまった。
何となく気まずいまま、僕らは三年になってしまった。
受験勉強の為、塾に通っていた沙希は部活を辞めてしまい、ますます僕を避けるようになった。
せっかく同じクラスになったのに、会話はほぼゼロ。
良く分からないけど、多分僕が悪いんだ。
何とか謝る機会を伺っていたが、見つからず、気付けば肌寒い季節になっていた。
陽も落ちるのが早くなって、部活が終わった頃にはもう薄暗かった。
車が行き交う大通りの歩道をトボトボ歩いていると、前に同じ学校の制服を着た女子が歩いている事に気付いた。
「・・・沙希？」
近づいてみると、やはり沙希だ。
「沙希！」
思い切って声をかけると、沙希はびっくりしたように振り向いた。
「もう暗いし、危ないから送るよ」
僕はニコッと笑って沙希の隣についた。
「・・・沙希、最近ずっと僕を避けてたよね」
「・・・そんなことないわよ」
ポツポツと進む会話。
沙希は俯いていてこちらを見てくれない。
あの大好きだった笑顔を最後に見たのは、いつだっただろうか。
「沙希、僕はね・・・」

沙希の方を見た僕の目に映ったのは、俯く沙希と、逆走してくるトラックだった。
「っ沙希！！！」
反射的に沙希を押しのけ、僕はトラックによって宙を舞った。
「・・・む、・・すむ！！」
真っ赤になった世界に、沙希の顔が浮かぶ。
ああ、せっかく可愛い顔なのに、涙でぐしゃぐしゃじゃないか。
沙希、良かった。無事だったんだね。
どうやら喉がやられているらしい。
ヒューヒュー、と空気がか細く抜けるだけで声にならなかった。
「進！！今救急車呼んだからね！進！進！！お願いっ、もう少しだから頑張って！！」
沙希、僕ね。
ずっと謝りたかった。
謝って、仲直りして、また全てが元通りになったら、伝えたい事があったんだ。
ねえ沙希。
「す・・・き、だよ」
そこで僕の意識は途絶えた。

8（後書き）

急展開ですね

9

僕は雲になりたかった。
嫌われ、疎まれる風じゃなく、綺麗で美しい、太陽に輝くような雲になりたかった。
君は風のようになりたいというけれど、僕はそうは思わない。
綺麗でたくさんの人に好かれる雲が、君が、僕の憧れだったんだ。
ほら、沙希。泣かないでよ。
僕、雲になれたよ。
一緒に生きることはできなくなったけど、一緒に泣いて、一緒に怒って、一緒に笑うことが出来る。
だからほら、笑ってよ。
僕の大好きな笑顔で、声で、笑ってよ。

10

新しい春を迎えた。
桜並木から降り注ぐ桃色の雨を浴びながら坂を上る、どこにでもあるような通学路。
ワタシは、何人もの生徒の合間を縫いながら歩いていた。
　あの日の交通事故は運転手の飲酒による居眠り運転が原因だった。
進の両親も友達も、運転手ばかりを責めて、誰もワタシを責めてはくれなかった。
ワタシの、せいなのに・・・。

あの日、やっと決心がついたワタシは、進に謝るために遅くまで残ってた。
でも、なかなか進が来なくて。
諦めて帰ろうとした時に、後ろから声をかけられた。
ああこれで、やっと謝る事が出来る。
そう、思ったのに・・・。
ねぇ、どうして？どうしてワタシを庇ったの？
あなたがいなくちゃ、謝る事が出来ないじゃない。
『避けてごめんね』『受賞おめでとう』って。
言うことが出来ないじゃない。
　ねえ、進。あなたの最後の言葉の意味を教えてよ。
あれはワタシに対して言った言葉って思ってもいいの？
だったら、ねえ。撤回して？
その言葉、ワタシから伝えたかったの。
ワタシから、言いたかったの。
進・・・。
「好きだよ」

上を見上げると、幾枚もの桃色の花びらが、風と一緒に踊っている。
新しい春を迎えたワタシは、あなたが好きと言ってくれた笑顔で、声で笑うから。
あなたがなりたいと言っていた雲になって、見守っていて。

１０（後書き）

これにて最後になります。
そう長くもない話でしたが、読んでいただきありがとうございました！
こういうのは初めて書くので、未熟な部分も多くて恥ずかしいかぎりです。

ではでは
またどこかにお会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0381v/

ミニ物語～風と雲～

2011年10月6日14時14分発行